

マルコ福音書の多層集中構造

村井 源

一 マルコ福音書と修辞構造

聖書には、当然のことながら、記された当時の文化を反映した種々の修辞的技法が施されていると考えられている。聖書中に含まれるさまざまな修辞的技巧の中で、テキストの構造を彩る修辞構造の技巧としては、交差配列法（キアスムス）や集中構造（コンチェントリック）が特に有名である。

テキストを、最終的編集者によって完成された一つながりのテキストとして読む、共時的な解釈の視点に立った場合、テキストの非偶発的な修辞構造を発見することは、筆者の意図を特定することにもつながる。特に集中構造には、入れ子構造の中心部分が筆者の主張の中心であることを明示する働きを持つ場合が多い。また、テキスト中の文の各要素と、他のどの要素が対応関係にあるかを、読者にとって明示的に理解可能とする効果も持つ。このため、福音書のテキスト解釈を行う上で、筆者が意図したであろう修辞構造の特定は重要な意味を持つ。本論文は、福音書の一つの文学的作品として読む、共時的な文学批評研究の立場から、マルコ福音書における全体的な集中構造を考察する。

福音書中で、マタイ福音書では、福音書の全体にわたるとえ話と説教の繰り返しにより構成される集中構造がすでに発見されている（注1）。ルカ福音書、ヨハネ福音書においても、全体にわたる集中構造を発見したとの報告がなされている（注2、3）。マルコ福音書に関しても、従来多数の修辞的構造が発見され、その全体像について種々の学説が提示されてきた。中には、マルコ福音書全体が一つの集中構造をとっているとの説もすでにいくつか提示されている。ただし、現在までに提示されている、マルコ福音書の全体にわたる集中構造の仮説は、恣意的に特定の部分のみをピックアップし、それらの部分のみの対応を考えるものや（注4）、対応関係を構築するため、マルコ福音書本文の付加や削除の仮定を伴うものであった（注5）。しかし、特定の箇所だけを恣意的にピックアップすると、理論上は膨大な数の集中構造を仮定できることになり、どれが筆者の真の意図した構造であるかは検証不可能となる。また、マルコ福音書において、多くの学者の見解が一致している大きな付加部分は十六章八節以降のエピローグ部分のみであり、その他の部分における大幅な付加や削除の仮定は、少なくとも現段階では、強い説得力を持たない。

二 マルコ福音書の五分割とその集中構造

本論文が提案するマルコ福音書の全体的な集中構造は、後世の付加と考えられるエピローグ部分（16:9-20）を除外すること以外は、現在の一般的な本文テキストに対しての付加や削除を必要としない。また、部分のみの恣意的なピックアップではなく、マルコ福音書の全ペリコピーを用いた集中構造の対応関係を説明可能である。

一般的なマルコ福音書の構成としては、ペトロの信仰告白（8:27-30）とエルサレム入城（11:1-11）のペリコピーが大きな区切り目と考えられている。また、文体の相違から、受難物語（十四章以降）は他の部分と異なり、ほぼ完成した伝承をマルコが取り入れたものと考えられることが多い。このため、大きく分けると四つの部分からマルコ福音書が構成されるという説が有力である。

本論文においては、マルコ福音書を、宣教の準備と開始（1:1-3:19）、ガラヤヤでの宣教（3:20-8:21）、受難の予告（8:22-10:52）、エルサレムでの宣教（11:1-13:37）、受難の復活（14:1-16:8）の五つに分ける（表1）。これは、一般的な四区分にあわせ、十二使徒の選定（3:13-19）とエルサレム論争（3:20-30）の間に区分を追加したものである。なお、ペトロの信仰告白での区分は、一つ前のペリコピー

である盲人の癒しからに切断位置を変更している。

これらの五区分を、さらに中心で前半と後半に分割する。このとき、五つに分けた各部分のペリコピー間と、前後に分けた合計十の各部分でのペリコピー間に二重の集中構造を見ることが出来る。また、マルコ全体も、二つに折って一つの巨大な集中構造となっている。つまり、マルコ福音書の一つの箇所には、最低でも（中心を共有するものも含めれば）三重の集中構造が重なっていると考えられる。以下では、五区分とその前半後半部分の境界、各部分における二重集中構造の対応関係について、順に示す。以下の文においては五つの区分を便宜上、**5-1**、**5-2**のように表記する。これらをさらに二分割した十区分は同様に**10-1**、**10-2**のように表記する。

5-1	(1:1-3:19)	宣教の準備と開始	10-1	(1:1-1:39)
5-2	(3:20-8:21)	ガリラヤでの宣教	10-3	(3:20-6:29)
5-3	(8:22-10:52)	受難の予告	10-5	(8:22-9:32)
5-4	(11:1-13:37)	エルサレムでの宣教	10-7	(11:1-12:34)
5-5	(14:1-16:8)	受難と復活	10-9	(14:1-14:72)

10-2	(1:35-3:19)		10-4	(6:14-8:21)
10-6	(9:30-10:52)		10-8	(12:35-13:37)
10-10	(14:66-16:8)			

表1
マルコ福音書の五分割

11-1 1:1-3:19 の構成

- A-1₁ 1:1 序
- B-2₁ 1:2-8 洗礼者ヨハネの宣教
- C-3₁ 1:9-11 イエスの受洗
- D-4₁ 1:12-13 誘惑を受ける
- E-5₁ 1:14-15 伝道を始める
- F-4₁ 1:16-20 弟子の召命
- G-3₁ 1:21-28 悪霊に憑かれた男
- H-2₁ 1:29-34 シモンペトロの姑の癒し
- I-1_{1,2} 1:35-39 イエスの祈りと宣教
- H-2₂ 1:40-45 重い皮膚病の人癒される
- G-3₂ 2:1-12 中風の人の癒し
- F-4₂ 2:13-17 マタイの召命
- E-5₂ 2:18-22 断食に関する教え
- D-4₂ 2:23-28 安息日に穂をつむ
- C-3₂ 3:1-6 手のなえた人を癒す
- B-2₂ 3:7-12 群集イエスの下に集まる
- A-1₂ 3:13-19 十二使徒の選定

図1 5-1の構成

- A-1₁ 1:1 序
- B-2₁ 1:2-8 洗礼者ヨハネの宣教
- C-3₁ 1:9-11 イエスの受洗
- D-4₁ 1:12-13 誘惑を受ける
- E-5₁ 1:14-15 伝道を始める
- F-4₁ 1:16-20 弟子の召命
- G-3₁ 1:21-28 悪霊に憑かれた男
- H-2₁ 1:29-34 シモンペトロの姑の癒し
- I-1_{1,2} 1:35-39 イエスの祈りと宣教
- I-1_{1,2} 1:35-39 イエスの祈りと宣教
- H-2₂ 1:40-45 重い皮膚病の人癒される
- G-3₂ 2:1-12 中風の人の癒し
- F-4₂ 2:13-17 マタイの召命
- E-5₂ 2:18-22 断食に関する教え
- D-4₂ 2:23-28 安息日に穂をつむ
- C-3₂ 3:1-6 手のなえた人を癒す
- B-2₂ 3:7-12 群集イエスの下に集まる
- A-1₂ 3:13-19 十二使徒の選定

図2 10-1の構成

図3 10-2の構成

*A-1₁と書いた場合、Aは五分割構造の対応対を、1は十分割構造での対応対を示し、最後の添え字の1は10-1に属することを表す。

10-1 は福音書の冒頭であり、洗礼者ヨハネの宣教とイエスの宣教の開始に挟まれた部分である。最も外側の1は「私より優れた方が後から来られる」(1:7)という言葉に対して、「そのために私は出てきたのである」(1:38)という形で、イエスに関する預言とその実現が対応している。次の2では、聖霊による、イエスが神の愛する子であるという宣言(1:11)に対し、悪霊たちもまたイエスが何者かを知っている(1:34)という記述がある。3では、イエスに仕える天使たちと、イエスの言葉を聞いて付き従う漁師たちの対応がある。10-1の中心にあるのは『時は満ち神の国は近づいた』という神の国到来のメッセージである。イエスが神の愛する子、神の聖者であることは超自然的レベルでは疑問のない自明のことでありながらも、その果たすべき役割については物語の冒頭部分ではまだ明らかにされない。

10-2 は、従来のフアリサイ派たちの解釈と矛盾するイエスの教えが述べられる。この箇所集中構造は五つの論争として知られる。まず1では、福音宣教が共通するキーワードである。前半ではイエスの宣教活動(1:39)が、後半では宣教のため選ばれた弟子たち(3:14-15)が描かれる。2では、病気を癒すイエスとその評判を聞きつけて押し寄せる群衆の記述が共通する。3でも、前半後半共に癒しの奇跡が物語られるが、癒しにあわせて律法学者・フアリサイ派との問答があることが共通している。4では、癒しの奇跡はなく、フアリサイ派との問で行われる、弟子やイエスに従う人に関する問答となつている点が共通している。10-2で中心に来るペリコピ(2:18-22)は、断食に関する問答である。

これら二つの集中構造を合わせ鏡のようにして構成される5-1は、八つの対と一つの中心から成る。最も外側のAは、福音宣教が共通するキーワードである。Bは、救いを求めて集まる人々に関する記述である。冒頭部では洗礼者ヨハネのもとに、また後半部分ではイエスの下に集まる人々が描かれている。Cは神の御心に適うことは何かというテーマに関係している。前半では聖霊によってイエスが神のみ心になうものであることが証される。後半は安息日に律法で許されることは何かという事柄に関してのペリコピーであるが、律法になうということはすなわち神のみ心になうことである。二つを対応させることによって、神のみ心になう存在としてのイエスが、新しい掟を示しているという構図であると考えられる。Dは従う者について語られており、前半ではイエスにつき従う天使たちが、後半ではイエスにつき従う弟子たち及びダビデにつき従う者たちのことが語られる。Eは福音の到来についてであり、前半では、洗礼者ヨハネによる神の国の到来が告げられ、後半では古い革袋に入れることのできない新しい葡萄酒の話が語られている。また後半では、花婿が奪い去られる日について語られており、これは前半の神の国の到来と対をなすものである。Fは弟子の召命についてであり、前半では漁師の召命が、後半では徴税人のレビの召命が語られている。Gは人の子の権威についてであり、前半では悪霊が言うことを聞く権威ある新しい教えに驚く人々の様子が、後半では罪を許すイエスに疑問を抱く人に対して人の子の権威を示すイエスの姿が描かれる。Hは病の癒しと、イエスのもとに集まる人々についてであり、前半ではイエスが病気を癒してもらうシモンの姑や近所の人々が描かれ、後半では重い皮膚病の人が癒されイエスのもとに人々が押し掛ける様子が描かれている。そして、これらすべての中心に来るのはイエスが宣教するために出てきたという言明(1:38)である。

11-11 3:20-8:21 の構成

10-3の対応は、一番外側の1が国と家の問題であり、「国がうちわで争えば…」(3:24-25)というイエスの言葉と、国王であるヘロデが家庭の問題で洗礼者ヨハネの首を切る話に対応している。2はイエスの兄弟の記述が共通して含まれており、イエスに会いに来る兄弟と、イエスはヤコブの兄弟ではないかというガリラヤの人の話に対応する。3は信仰の実りがテーマで、百倍の実を結ぶ種(4:20)と、信仰によって救われる者(5:34)が対応する。4には宣教に関する記述があり、秘められたものが明らかになるといふたとえ(4:22)と、

イエスのことをデカポリス中に広める男(5:20)が対応している。10-3の中心に来るペリコピーは、嵐を静めるイエスと、信じられない弟子の物語であり、この箇所全体が宣教とそれを信じることに関するものであることがわかる。

- A-1₃ 3:20-30 ヴルゼブル論争
- B-2₃ 3:31-35 イエスの母と兄弟
- C-3₃ 4:1-20 種を蒔く人のたとえ
- D-4₃ 4:21-34 神の国のたとえ
- E-5₃ 4:35-41 あらしを静める
- F-4₃ 5:1-20 ゲラサの悪魔付
- G-3₃ 5:21-43 ヤイロの娘とイエスの服に触れる女
- H-2₃ 6:1-13 郷里におけるイエス・十二使徒の派遣
- I-1₃₋₄ 6:14-29 洗礼者ヨハネ殺される
- H²-2₄ 6:30-44 給食奇跡
- G³-3₄ 6:45-52 水の上を歩くイエス
- F⁴-4₄ 6:53-56 癒しの奇跡
- E⁵-5₄ 7:1-23 昔の人の言い伝え
- D⁴-4₄ 7:24-30 シリア・フェニキア女の信仰
- C³-3₄ 7:31-37 耳が聞こえず舌のまわらない人を癒す
- B²-2₄ 8:1-10 給食奇跡
- A¹-1₄ 8:11-21 ファリサイ派とヘロデのパン種

図 4 5-2の構成

- A-1₃ 3:20-30 ヴルゼブル論争
- B-2₃ 3:31-35 イエスの母と兄弟
- C-3₃ 4:1-20 種を蒔く人のたとえ
- D-4₃ 4:21-34 神の国のたとえ
- E-5₃ 4:35-41 あらしを静める
- F-4₃ 5:1-20 ゲラサの悪魔付
- G-3₃ 5:21-43 ヤイロの娘とイエスの服に触れる女
- H-2₃ 6:1-13 郷里におけるイエス・十二使徒の派遣
- I-1₃₋₄ 6:14-29 洗礼者ヨハネ殺される
- I-1₃₋₄ 6:14-29 洗礼者ヨハネ殺される
- H²-2₄ 6:30-44 給食奇跡
- G³-3₄ 6:45-52 水の上を歩くイエス
- F⁴-4₄ 6:53-56 癒しの奇跡
- E⁵-5₄ 7:1-23 昔の人の言い伝え
- D⁴-4₄ 7:24-30 シリア・フェニキア女の信仰
- C³-3₄ 7:31-37 耳が聞こえず舌のまわらない人を癒す
- B²-2₄ 8:1-10 給食奇跡
- A¹-1₄ 8:11-21 ファリサイ派とヘロデのパン種

図 5 10-3の構成

- I-1₃₋₄ 6:14-29 洗礼者ヨハネ殺される
- H²-2₄ 6:30-44 給食奇跡
- G³-3₄ 6:45-52 水の上を歩くイエス
- F⁴-4₄ 6:53-56 癒しの奇跡
- E⁵-5₄ 7:1-23 昔の人の言い伝え
- D⁴-4₄ 7:24-30 シリア・フェニキア女の信仰
- C³-3₄ 7:31-37 耳が聞こえず舌のまわらない人を癒す
- B²-2₄ 8:1-10 給食奇跡
- A¹-1₄ 8:11-21 ファリサイ派とヘロデのパン種

図 6 10-4の構成

10-4の対応は、1がヘロデの悪についてであり、洗礼者ヨハネの斬首と、ヘロデ派のパン種への注意(8:15)が対応している。2は、どちらも給食奇跡のペリコピーである。3は神の力に驚く人々であり、驚く弟子たち(6:51)と人々(7:37)が対応する。4ではイエスに救いを求める人々について語られている。せめてその服の裾にでも触れたい(6:56)という人々と、食卓から落ちるパンくずを拾う犬のようにでも救われたいという女性(7:28)の物語が語られている。そして中心には人を汚すもののテーマでのファリサイ派との議論とイエスのたとえが語られている。先の10-3が宣教を信じることであったのに対し、10-4はイエスと共に食事をし、イエスの行動に心を揺さぶられることで、人を汚すものから解放され救いへと与る道が示され、悟りへと招かれているといえよう。

10-3・10-4を合わせた5-2では、一番外側のAが悪の種のテーマで記されており、前半はエルサレムから下ってきてイエスの批判を受ける律法学者(3:22)、後半はファリサイ派とヘロデ派のパン種が言及される。Bでは、その逆にイエスの周りに座る人々(3:34, 8:6)が描かれる。Cでのテーマは聞く耳であり、「聞く耳のある者は聞きなさい」(4:9)という言葉と聞こえない人を癒す奇跡(7:37)が対応する。元々聞く耳を持ったものだけを救うのではなく、聞こえないものは聞こえるようにして救うというのがイエスの福音宣教であるとわかる。Dでは、成長する種のたとえと、異邦人であるシリア・フェニキアの女まで救いを求める物語によって神の国の拡大が描かれる。Eは不信仰がテーマであり、弟子(4:40)とイスラエルの民全体の不信仰(7:6)が記される。Fはともに奇跡物語であり、多くの者の集まった悪霊であるレギオンを払う話と、多くの人が町々でいやされる話(6:56)が対応する。Gではイエスの奇跡に大きく驚く様子が

共通しており、驚きの余りわれを忘れる人々 (5:42) と心の中で非常に驚く弟子たち (6:51) が対応する。Hでは、パンを持たずに行動する様子が、弟子の派遣 (6:8) と給食奇跡で描かれる。中心のIは、洗礼者ヨハネの殺害であり、5-2の全体としては、神の国が拡大し、それに驚き、聞く耳を持つように招かれる人々が増えていく一方で、ヘロデをはじめとする悪に注意しなければならぬ状況が生まれてきていることが描かれているといえよう。

11-11 8:22-10:52 の構成

A-1₅ 8:22-26 盲人癒される
 B-2₅ 8:27-30 ペトロの信仰告白
 C-3₅ 8:31-33 受難の予告一
 D-4₅ 8:34-38 イエスに従うもの
 E-5₅ 9:1 死なない者の預言
 F-4₅ 9:2-8 イエスの変容
 G-3₅ 9:9-13 エリヤが来る
 H-2₅ 9:14-29 悪霊に憑かれた子
 I-1_{5,6} 9:30-32 受難の予告二
 H-2₆ 9:33-41 一番偉い者の警告
 G-3₆ 9:42-50 誘惑についでこの警告
 F-4₆ 10:1-12 離婚の問題
 E-5₆ 10:13-16 イエスと幼子たち
 D-4₆ 10:17-31 金持ちの青年
 C-3₆ 10:32-34 受難の予告二
 B-2₆ 10:35-45 ゼンダイの子らの願い
 A-1₆ 10:46-52 エリコの盲人癒される

図7 5-3の構成

A-1₅ 8:22-26 盲人癒される
 B-2₅ 8:27-30 ペトロの信仰告白
 C-3₅ 8:31-33 受難の予告一
 D-4₅ 8:34-38 イエスに従うもの
 E-5₅ 9:1 死なない者の預言
 F-4₅ 9:2-8 イエスの変容
 G-3₅ 9:9-13 エリヤが来る
 H-2₅ 9:14-29 悪霊に憑かれた子
 I-1_{5,6} 9:30-32 受難の予告二
 I-1_{5,6} 9:30-32 受難の予告二
 H-2₆ 9:33-41 一番偉い者の警告
 G-3₆ 9:42-50 誘惑についでこの警告
 F-4₆ 10:1-12 離婚の問題
 E-5₆ 10:13-16 イエスと幼子たち
 D-4₆ 10:17-31 金持ちの青年
 C-3₆ 10:32-34 受難の予告二
 B-2₆ 10:35-45 ゼンダイの子らの願い
 A-1₆ 10:46-52 エリコの盲人癒される

図8 10-5の構成

図9 10-6の構成

10-5では、1は、イエスに癒されて見えるようになる盲人と、イエスの言葉が分からないままの弟子たちが対比される。2では信仰がテーマであり、イエスをメシアというペトロに対し、信仰のない自分を救うように願う父親が対比されている。3は苦しみを受ける人の子の預言が共通しており、前半はイエスによる最初の受難予告、後半はイエスによる旧約の預言の説明となっている。4は主の再臨の預言と、その前表である主の変容が対比されており、栄光に輝いて天使とともに来る再臨の主に対して、真っ白に輝きモーセとエリヤを伴って現れるイエスが対になって描かれている。10-5の中心は、神の国が到来を見るまで死を味合わない人々がいるという預言である。

10-6では、1は10-5と同様に、見えなかったがイエスに癒されて見えるようになる盲人と、イエスの言葉が分からないままの弟子たちが対比されている。2では、弟子の順番の問題が共通しており、偉くなりたい者は皆に仕えるものになるようにうながされる (9:35, 10:43)。3では、同じ死であっても、復活のない地獄の描写と、復活のあるイエスの受難が対比されていると考えられる。4では、一緒である家族と離れるべき家族の対比があり、前半ではモーセによって結び付けられたものとして妻と夫が切り離せない存在として描かれ、

後半では父母や兄弟や財産は神の国に入るために捨てるべきものであることが対照的に語られる。10-6 の中心では、神の国に入れるのは幼子のように神の国をうけいれるものだけであることが語られる。

5-3 においては、まず外側の A では、盲人の癒しの話が共通している。B は、弟子によるイエスへの信仰告白であり、イエスがメシアであるというペトロの信仰告白 (8:29) と、イエスが栄光をお受けになる方であるというゼベダイの兄弟の信仰告白 (10:37) が対応している。C は一番目と三番目の受難の予告が対応している。D はイエスに従うため・神の国に入るために捨てるべきものがあるとの内容が語られている。E では神の国に招かれる人が共通のテーマであり、前半では神の国が来るまで死なないものが (9:1)、後半では神の国に入る事が許されるもの (10:15) が描かれる。F は旧約の教えを引き継ぎ新たにするイエスについて語られ、前半ではモーセやエリヤと語らうイエスが、後半ではモーセのおきてを新たに解釈しなおすイエスの姿が描かれる。G では死と復活がテーマとなっており、前半では死者の中から復活することについて語られ、後半では逆に復活のない永遠の死 (9:44) について語られる。H では、奇跡を行う力の問題が取り上げられ、信仰が足りず悪霊を追い出せない弟子たちと、逆にイエスの名を使って弟子でもないのに悪霊を追い出す人々が対比される。そして中心に来るのは I の、二番目のイエスの受難の予告である。5-3 の全体的なテーマはイエスの受難と復活の預言、そして復活と深く関連する神の国の問題であり、またそれを理解できない弟子たちも一つの鍵となってくる。

11-1-13:37 の構成

- A-1⁷ 11:1-11 エルサレム入城
- B-2⁷ 11:12-14 イチジクの木を呪う
- C-3⁷ 11:15-19 商人を追い出す
- D-4⁷ 11:20-26 枯れたイチジクの木の教訓
- E-5⁷ 11:27-33 イエスの権威
- F-4⁷ 12:1-12 ぶどう園のたとえ
- G-3⁷ 12:13-17 皇帝への税金
- H-2⁷ 12:18-27 復活についての問答
- I-1^{7,8} 12:28-34 **最も大切な掟**
- H-2⁸ 12:35-37 ダビデの子についての問答
- G-3⁸ 12:38-40 律法学者を非難する
- F-4⁸ 13:1-13 ぶどう園の献金
- E-5⁸ 13:1-13 神殿の崩壊を予告する・終末の徴
- D-4⁸ 13:14-23 大きな苦難を予告
- C-3⁸ 13:24-27 人の子がくる
- B-2⁸ 13:28-31 イチジクの木の教え
- A-1⁸ 13:32-37 目を覚まして

図 10 5-4 の構成

- A-1⁷ 11:1-11 エルサレム入城
- B-2⁷ 11:12-14 イチジクの木を呪う
- C-3⁷ 11:15-19 商人を追い出す
- D-4⁷ 11:20-26 枯れたイチジクの木の教訓
- E-5⁷ 11:27-33 **イエスの権威**
- F-4⁷ 12:1-12 ぶどう園のたとえ
- G-3⁷ 12:13-17 皇帝への税金
- H-2⁷ 12:18-27 復活についての問答
- I-1^{7,8} 12:28-34 最も大切な掟
- I-1^{7,8} 12:28-34 最も大切な掟
- H-2⁸ 12:35-37 ダビデの子についての問答
- G-3⁸ 12:38-40 律法学者を非難する
- F-4⁸ 13:1-13 ぶどう園の献金
- E-5⁸ 13:1-13 **神殿の崩壊を予告する・終末の徴**
- D-4⁸ 13:14-23 大きな苦難を予告
- C-3⁸ 13:24-27 人の子がくる
- B-2⁸ 13:28-31 イチジクの木の教え
- A-1⁸ 13:32-37 目を覚まして

図 11 10-7 の構成

図 12 10-8 の構成

10-7 での対応は、まず 1 では「父ダビデの来るべき国」(11:10) が来るというエルサレム入場での興奮と、イエスの語る「あなたは神の国から遠くなく」(12:34) という言葉が、ときが差し迫ったことを示している。2 では、実りのなさが共通していると考えられ、実の

ないいちじくと (11:13) 子をなさない女 (12:20-22) が物語られている。3では、神の国と人の国の相違が描かれ、商売や税金のような金銭の絡むこの世での人の営みを超越した神の国のありようが論されている。4では、どのようなことも信仰によって可能となること (11:23) を、捨てられた石が親石となること (12:10) を通して、再び人の思いを超えた神の業について語られている。10-7の中心にはイエスの権威についての問答が配置される。10-7で語られているのは人間の思いと神の思いの齟齬、人の国と神の国の相違であろう。10-8との対応は、まず1が、「心を尽くし…」 (12:30) と「目を覚ましていなさい」 (13:33) という言葉で、神に対する人間の心構えについて述べていると考えられる。2では、終末の訪れが、ダビデの歌 (12:36) とイエスの警告 (13:29) によって語られる。3では、終わりの日の裁きについて語られており、裁かれる偽善者 (12:40) と終末に呼び集められる人々 (13:27) が対比されている。4では、女性の記述が対応しており、貧しいやもめ (12:43) と終わりの日の身重の女と乳飲み子を持つ女 (13:17) が対応していると考えられる。10-8の中心に来るのは、弟子たちの福音宣教における受難の預言である。10-8は主に終末的な状況についての警告であるが、その中で「まず福音があらゆる民に述べ伝えられなければならない」と語られている。終末が迫り来る状況の中で、福音を述べ伝えることの緊急性が強調されているといえよう。

5-4における対応は、まずAは、主が帰ってくるというテーマ (エルサレム入城と主人のたとえ) が共通している。Bでは、イチジクの木についての物語が継続して対応する。Cでは、神殿に来るイエスと終末のときに来る人の子を重ね合わせ、ひっくり返して商売人を追い出すイエス (11:15) と、天地が揺り動かされた後に人々を呼び集める人の子 (13:26) が対比される。Dでは、信仰についてだが、前半の神への正しい信仰と祈りの教え (11:22) 対し、後半は逆に偽メシアを信じないようという警告 (13:21) が対照的に語られる。Eでは、イエスの証がテーマであり、権威について証するイエス (11:29-30) と、権力者の前で証する弟子 (13:9) が対応する。Fでは、貧しいやもめが最も多く寄付をする (12:43)、あるいは捨てられた石が隅の親石となる (12:10) ような人知を超えた神の神秘について、描かれる。Gでは、ファリサイ派や律法学者の偽善が語られる (12:13, 12:38)。Hでは、アブラハム・イサク・ヤコブの神 (12:26) であり、ダビデの神 (12:36) でもあるところ、イスラエルの歴史を通じて神である主について語られている。中心となるIでは、旧約の中で最も大切な掟がテーマである。5-4全体としては、旧約を通して現れた神と、人の子の訪れが一連の出来事であり、人の子に呼び集められたものが神の国へと招かれることが明かされているのではないかと考えられる。

11-14 14:1-16:8 の構成

10-9における対応は、まず1では、イエスを殺そうとする計略と、ペトロの否認が対応し、イエスを十字架に追いやる人の悪と罪の問題が共通していると考えられる。2では、イエスはあなた方といつも一緒にいられるわけではない (14:7) と語り、また人の子は神の右に座す (14:62) と言いつつ、自身が特別な役割を持った存在であることを示唆している。3では、ユダの裏切りの計画 (14:10) とその実行 (14:45) とどう対応が見られ、ユダの行動が共通する。4では、聖体の制定 (14:23) とゲッセマネの祈り (14:36) における「杯」 (potion) が対応している。そして中心には、ペトロの離反の予告が来る。10-9全体としては罪を犯さざるを得ない人間の弱さのためにイエスが受難という「杯」を飲まなければならないことが示唆されるといえよう。

10-10における対応は、まず1では、ペトロの否認と、復活における「行って、弟子たちとペトロに告げなさい。」という使いの言葉より、ペトロが共通していることがわかる。2は、どちらもピラトとの対話であり、イエスに関して不思議に思う (gamazw) 様子が共通する。3では、ピラトは「ユダヤ人の王とお前たちが言っているあの者」 (15:12) と言うのに対し、百人隊長は「本当に、この人は神の

子だった」(15:39)と語る。このためイエスの理解の問題がテーマであると考えられる。4では、葦の棒を使った虐待が共通している(15:19, 15:36)。10-10の中心に来るのは、十字架上で人々から侮辱を受ける場面である。10-10においても10-9と同じく人間の無理解と弱さがイエスの受難へとつながっていく構造を見て取ることができよう。しかしながら最後にペトロに告げよ、と語られることで、人間の弱さを超えて働かれる神の力が示唆されていると考えられる。

- A-1₉ 14:1-2 イエスを殺す計略
- B-2₉ 14:3-9 香油を注がれる
- C-3₉ 14:10-11 ユダ裏切りを企てる
- D-4₉ 14:12-26 主の晩餐
- E-5₉ 14:27-31 ペトロの離反の予告
- F-4₉ 14:32-42 ゲッセマネ
- G-3₉ 14:43-52 逮捕される
- H-2₉ 14:53-65 裁判を受ける
- I-1_{9,10} 14:66-72 ペトロの否認
- H-2₁₀ 15:1-5 ピラトの尋問
- G-3₁₀ 15:6-15 死刑の判決を受ける
- F-4₁₀ 15:16-24 十字架への道行
- E-5₁₀ 15:25-32 十字架での侮辱
- D-4₁₀ 15:33-38 十字架での死
- C-3₁₀ 15:39-41 イエスの死に立ち会う弟子
- B-2₁₀ 15:42-47 墓に葬られる
- A-1₁₀ 16:1-8 復活する

図 1 3 5-5の構成

- A-1₉ 14:1-2 イエスを殺す計略
- B-2₉ 14:3-9 香油を注がれる
- C-3₉ 14:10-11 ユダ裏切りを企てる
- D-4₉ 14:12-26 主の晩餐
- E-5₉ 14:27-31 ペトロの離反の予告
- F-4₉ 14:32-42 ゲッセマネ
- G-3₉ 14:43-52 逮捕される
- H-2₉ 14:53-65 裁判を受ける
- I-1_{9,10} 14:66-72 ペトロの否認
- I-1_{9,10} 14:66-72 ペトロの否認
- H-2₁₀ 15:1-5 ピラトの尋問
- G-3₁₀ 15:6-15 死刑の判決を受ける
- F-4₁₀ 15:16-24 十字架への道行
- E-5₁₀ 15:25-32 十字架での侮辱
- D-4₁₀ 15:33-38 十字架での死
- C-3₁₀ 15:39-41 イエスの死に立ち会う弟子
- B-2₁₀ 15:42-47 墓に葬られる
- A-1₁₀ 16:1-8 復活する

図 1 4 10-9の構成

図 1 5 10-10の構成

5-5における対応では、まずAが描くのは、イエスを殺そうとする計略と、殺されたにもかかわらず復活するイエスの対比である。Bは埋葬というテーマで共通しており、前半ではベタニアの女性によって、後半ではアリマタヤのヨセフによって埋葬の準備が行われる。Cは、イエスを裏切ろうとするユダ(14:10)と、十字架のイエスにも従う女性の弟子たち(15:41)が対比されている。Dでは、前半の「これは、多くの人のために流されるわたしの血」(14:24)という聖体制定の言葉と受難の出来事が対応している。また神の国で飲む時まじりぶどうの実から作ったものを飲むことがない(14:25)という預言が、葦の棒につけられたぶどう酒(15:36)を飲まないことと対応する。Eでは、ペトロが三度イエスを否認するという予告と、十字架上でイエスが三度ののしられる(通りかかった人々、祭司長と律法学者、十字架上の罪人)ことがイエスを三度否認するという点で対応している。Fでは、ゲッセマネにおける受難の、自由意思による受諾(14:36)と十字架刑での没薬入りのぶどう酒の拒否(15:23)が苦しみの受諾という点で共通していると考えられる。Gでは、群衆によってイエスが捕らえられ(14:46)、十字架につけようとする(15:13)様子が描かれる。Hは、裁判の場面である点が共通するが、ユダヤ人たちは「お前はほむべき方の子、メシアなのか」(14:61)と問うのに対し、ピラトは「お前がユダヤ人の王なのか」(15:2)と問う点は特に対照的である。中心のIは、ペトロの否認であり、全体としては受難が人間の弱さと愚かさによって引き起こされるものであるが、イエスはそれを自由意思で受け入れて、最終的に復活によって勝利することが示されている。

三 マルコ福音書全体での集中構造

二章ではマルコ福音書を五分割する集中構造を示したが、マルコ福音書全体にわたる集中構造も存在する。マルコ福音書を五分割の時と同様に、全体で八十五のペリコピーとみなすと、四十三番目の受難の予告一(9:30-32)を中心とする四十二対の集中構造ができる。紙面の都合上、対応するペリコピーとそのタイトルを表2に、共通テーマと対応箇所のみを表3に示す。なお、ほとんどの対応に関して複数の共通性が見出されるが、表中には基本的にそのうちで主要な一つのみを示す。表2中の色つき部分は、後述する従来のペリコピーの区分と切断位置の異なる個所である。

番号	箇所	表題	箇所	表題
1	1:1	序	16:1-8	復活する
2	1:2-8	洗礼者ヨハネの宣教	15:42-47	墓に葬られる
3	1:9-11	イエスの受洗	15:39-41	イエスの死に立ち会うもの
4	1:12-13	誘惑を受ける	15:33-38	十字架での死
5	1:14-15	伝道を始める	15:25-32	十字架上で侮辱
6	1:16-20	弟子の召命	15:16-24	十字架への道行き
7	1:21-28	悪霊に憑かれた男	15:6-15	死刑の判決を受ける
8	1:29-34	シモンペトロの姑の癒し	15:1-5	ピラトの尋問
9	1:35-39	イエズスの祈りと宣教	14:66-72	ペトロの否認
10	1:40-45	重い皮膚病の人癒される	14:53-65	裁判を受ける
11	2:1-12	中風の人の癒し	14:43-52	逮捕される
12	2:13-17	レビの召命	14:32-42	ゲッセマネ
13	2:18-22	断食に関する教え	14:27-31	ペトロの離反の予告
14	2:23-28	安息日に穂をつむ	14:12-26	主の晩餐
15	3:1-6	手のなえた人を癒す	14:10-11	ユダ裏切りを企てる
16	3:7-12	群衆イエスの下に集まる	14:3-9	香油を注がれる
17	3:13-19	十二使徒の選定	14:1-2	イエスを殺す計略
18	3:20-30	ベルゼブル論争	13:32-37	目を覚ましていなさい
19	3:31-35	イエスの母と兄弟	13:28-31	イチジクの木の教え
20	4:1-20	種を蒔く人のたとえ	13:24-27	人の子がくる
21	4:21-34	神の国のたとえ	13:14-23	大きな苦難を予告
22	4:35-41	あらしを静める	13:1-13	エルサレム滅亡の予告・迫害の予告
23	5:1-20	ゲラサの悪魔付	12:41-44	やもめの献金
24	5:21-43	ヤイロの娘とイエスの服に触れる女	12:38-40	律法学者を非難
25	6:1-13	郷里におけるイエズス・十二使徒の派遣	12:35-37	ダビデの子についての問答
26	6:14-29	洗礼者ヨハネ殺される	12:28-34	最も大切な掟
27	6:30-44	給食奇跡	12:18-27	復活についての問答
28	6:45-52	水の上を歩くイエス	12:13-17	皇帝への税金
29	6:53-56	癒しの奇跡	12:1-12	ぶどう園のたとえ
30	7:1-23	昔の人の言い伝え	11:27-33	イエスの権威
31	7:24-30	シリアフェニキア女の信仰	11:20-26	枯れたイチジクの木の教訓
32	7:31-37	耳が聞こえず舌の回らな	11:15-19	商人を追い出す
33	8:1-10	給食奇跡	11:12-14	イチジクの木を呪う
34	8:11-21	ファリサイ派とヘロデのパン種	11:1-11	エルサレム入城
35	8:22-26	盲人癒される	10:46-52	エリコの盲人癒される
36	8:27-30	ペトロの信仰告白	10:35-45	ゼベダイの子らの願い
37	8:31-33	受難の予告一	10:32-34	受難の予告三
38	8:34-38	イエズスに従うもの	10:17-31	金持ちの青年
39	9:1	死なないものの預言	10:13-16	イエズスと幼子たち
40	9:2-8	イエスの変容	10:1-12	離婚の問題
41	9:9-13	エリヤが来る	9:42-50	誘惑についての警告
42	9:14-29	悪霊に憑かれた子	9:33-41	一番偉いもの・逆らわないものは味方

表2 マルコ福音書全体の集中構造の対応ペリコピー

番号	テーマ	前半の対応箇所	後半の対応箇所
1	福音	福音の初め(1:1)	さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。(16:7)
2	神の国の訪れ	わたしはあなたより先に使者を遣わし、あなたの道を準備させよう(1:2)	この人も神の国を待ち望んでいたのである(15:43)
3	神の子	あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者(1:11)	本当に、この人は神の子だった(15:39)
4	誘惑に打ち勝つ	サタンから誘惑を受けられた。(1:13)	わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか(15:34)
5	信仰	悔い改めて福音を信じなさい(1:15)	それを見たら、信じてやろう。(15:32)
6	シモン	シモンペトロの召命	十字架を背負わされるキレネ人シモン
7	イエスの呼称	正体は分かっている。神の聖者だ(1:24)	あのユダヤ人の王を釈放してほしいのか(15:9)
8	イエスは何者か	悪霊はイエスを知っていたからである。(1:34)	お前がユダヤ人の王なのか(15:1)
9	イエスとペトロ	シモンとその仲間はイエスの後を追う(1:36)	ペトロの否認
10	何も話さない	だれにも、何も話さないように気をつけなさい(1:44)	イエスは黙り続け何もお答えにならなかった(14:61)
11	群衆の中から出て行く者	その人は起き上がり、すぐに床を担いで、皆の見ている前を出て行った。(2:12)	人々が捕らえようとすると、亜麻布を捨てて裸で逃げた。(14:51-52)
12	人の弱さ	医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。(2:17)	心は燃えても、肉体は弱い。(14:38)
13	弟子と離れることの預言	花婿が奪い取られる時が来る。その日には、彼らは断食することになる(2:20)	わたしは羊飼いを打つ。すると、羊は散ってしまう(14:27)
14	共に食べる者	ダビデは神の家に入り、祭司のほかにはだれも食べてはならない供えのパンを食べ、一緒にいた者たちにも与えた(2:26)	イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えて言われた。(14:22)
15	殺害の準備	どのようにしてイエスを殺そうかと相談し始めた(3:6)	ユダは、イエスを引き渡そうとして、祭司長たちのところへ出かけて行った。(14:10)
16	イエスとともにいる	イエスは弟子たちと共に湖の方へ立ち去られた。ガリラヤから来たおびただしい群衆が従った(3:7)	貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいる…しかし、わたしはいつも一緒にいるわけではない(14:7)
17	イエス殺害の計略	このユダがイエスを裏切ったのである。(3:19)	祭司長たちや律法学者たちは、なんとか計略を用いてイエスを捕らえて殺そうと考えていた。(14:1)
18	家財と侵入者	「まず強い人を縛り上げなければ、だれも、その人の家に押し入って、家財道具を奪い取ることはできない。」(3:27)	家を後に旅に出る人が、僕たちに仕事を割り当てて責任を持たせ、門番には目を覚ましておくようにと、言いつけておくようなものだ。(13:34)
19	戸口に近づくもの	イエスの母と兄弟たちが来て外に立ち、人をやってイエスを呼ばせた。(3:31)	人の子が戸口に近づいていると悟りなさい。(13:29)
20	神の国に入るもの	種まきのたとえ	地の果てから天の果てまで、彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める(13:27)
21	弟子たちにすべてを語る	御自分の弟子たちにはひそかにすべてを説明された(4:34)	一切の事を前もって言うておく(13:23)
22	恐れるな	なぜ怖がるのか。まだ信じないのか(4:40)	引き渡され、連れて行かれるとき、何を言おうかと取り越し苦労をしてはならない(13:11)
23	ローマの単位(大と小)	レギオン	レプトン
24	食べ物にされる女性	多くの医者にかかって、ひどく苦しめられ、全財産を使い果たしても何の役にも立たず、ますます悪くなるだけであった。(5:26)	やもめの家を食べ物にし(12:40)
25	イエスは人の子か	マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか(6:3)	どうして律法学者たちは、『メシアはダビデの子だ』と言うのか(12:35)
26	神を愛せ	洗礼者ヨハネの殉教	心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい(12:30)
27	イスラエルの神	パンの屑と魚の残りを集めると、十二の籠にいっぱいになった(6:43)	わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神(12:26)
28	人々の驚き	弟子たちは心の中で非常に驚いた(6:51)	彼らは、イエスの答えに驚き入った(12:17)
29	神の救い	イエスに癒される病人たち	詩編118:23-24の引用。今日こそ主の御業の日、今日を喜び祝い、喜び躍ろう(詩編118:24)
30	どこからかという問い	人を汚すものは内からか外からか	ヨハネの洗礼は天からか人からか
31	祈り求め実現する	主よ、しかし、食卓の下の小犬も、子供のパン屑はいただきます(7:27)	祈り求めるものはすべて既に得られたと信じなさい(11:24)
32	出す	天を仰いで深く息をつき(παύω)、その人に向かって、「エッファタ」と言われた(7:33)	イエスは神殿の境内に入り、そこで売り買っていた人々を追い出し(εκπαύω)(11:15)
33	空腹と食物	給食奇跡	実のないいちじくを喰う
34	イスラエル・神の栄光	十二の籠(イスラエル)、七の籠(神の力)	我らの父ダビデの来るべき国(11:10)、いと高きところにホサナ(11:10)
35	盲人の癒し	ベトサイダで盲人を癒す	盲人バルティマイを癒す
36	イエスはメシア	ペトロの信仰告白(8:29)	ヤコブとヨハネの信仰告白(10:37)
37	受難の予告	最初の受難予告	三番目の受難予告
38	福音への迫害と命	福音のために命を失うものはそれを救う(8:35)	福音のために家…を捨てたものは今この世で迫害も受けるが、…後の世では永遠の命を受ける(10:29-30)
39	神の国に入るもの	神の国が来るまで死なないもの(9:1)	神の国はこのような者たちのものである(10:15)
40	モーセ	エリヤがモーセと共に現れて…(9:4)	モーセはあなたたちに何と命じたか(10:3)
41	死と復活	死者の中から復活する(9:10)	火の尽きることはない地獄(9:48)
42	悪霊	汚れた霊(9:25)	悪霊(9:38)
	子	霊に取り付かれてものもいえない子(9:17)	私の名のためにこのような子供の一人を受け入れるものは私を受け入れるのである(9:37)

表3 マルコ福音書全体の集中構造の各共通テーマと箇所

四 ペリコピエの区分

本論文においては、前述の通りマルコ福音書を八十五のペリコピエに分割したが、このうち新共同訳聖書の区分と一致するのが六十五箇所、新共同訳とは一致しないがフランシスコ会訳と一致するのが七箇所である。また新共同訳で複数のペリコピエとされている箇所を結合したものが七箇所有り、それ以外に区分が他とは一致しない箇所が六箇所存在する。新共同訳での区分は受難の箇所(15:1-11)とイエスの逮捕での逃げる若者の箇所(14:51-52)以外は、国際的に定評のあるネストレ版の校訂テキストの区分と一致している。本節では、区分の仕方が従来の切り方と一致しない箇所、(八十五ペリコピエ中の十三箇所、表2の色つき部分)について、そのような区分となった根拠を共時的解釈の視点から以下に順に示す。

四一 4:1-20

この箇所は、新共同訳では「種を蒔く人」のたとえ、たとえを用いて話す理由、「種を蒔く人」のたとえの説明、の三つのペリコピエからなる。テキストの成り立ちとしては、元々存在した「種を蒔く人」のたとえに教会の解釈が付加されたものとも考えられる(注6)。そのため、成立を考えた場合には三つのペリコピエとなるが、この箇所の修辭構造は左図のような集中構造となっており、中心部にあるイザヤの引用「彼らを見るには見るが…」がこの箇所の中心的テーマであることが、三つのペリコピエの連続的な配置によって示される。このため、最終的な編集者の立場としては「種を蒔く人」に関する一連の物語と見ることも可能である。と考えられる。

A 4:1-9

「種を蒔く人」のたとえ

B 4:10-12

たとえを用いて話す理由

A' 4:13-20

「種を蒔く人」のたとえの説明

図 1 6
4:1-20
の構成

四二 4:21-34

この箇所も新共同訳では、「ともし火」と「秤」のたとえ、「成長する種」のたとえ、「からし種」のたとえ、たとえを用いて語る、の四つのペリコピエである。これらはQ資料のそれぞれ別の位置に属すると考えられるが、これらの四つのたとえもマルコによって一連のたとえ集としてまとめられ、編集句によってつながりあわされたものであると考えられている(注7)。

四三 6:1-13

この箇所は新共同訳等では、「ナザレで受け入れられない」と「十二人を派遣する」の二つのペリコピエとなっている。しかし、この二箇所を結合した場合、左図のような集中構造が現れるため、元々二つのペリコピエが編集段階で一つに合わさったと考えられる。Aの対応はイエスと弟子のそれぞれの宣教、Bの対応はイエスや弟子を受け入れない人々についての記述、Cの対応は奇跡を行い得ないイエスと奇跡を起こす力を与えられる弟子、であり、中心にはDの人々の不信仰に驚かれたイエスの姿が配置されている。

- A 6:1-2a 宣教するイエス
- B 6:2b-3 イエスを受け入れない人々
- C 6:4-5 奇跡をおこなえないイエス
- D 6:6 「人々の不信仰に驚かれた。」
- C' 6:7-9 弟子に汚れた霊に対する権能を授けるイエス
- B' 6:10-11 弟子を受け入れない人々への対処
- A' 6:12-13 宣教する十二人

図 17
6:1-13 の構成

図一四 8:11-21

この箇所も先と同様に新共同訳では二つのペリコピーからなるが、結合することで左図のように一つの集中構造を見出すことができる。この箇所もやはり、二つのペリコピーが編集段階で一つのペリコピーとされた箇所ではないかと考えられる。Aでは「しるし」が共通し、Bではしるしを与えられないファリサイ派としるしを与えられたのに理解できない弟子が対比される。Cでは弟子がパンを忘れた話題が共通し、中心のDにはファリサイ派たちのパン種に気をつけるようにとの勧告が位置する。

- A 8:11 ファリサイ派が求める天のしるし
- B 8:12-13 「今の時代の者たちには、決してしるしは与えられない。」
- C 8:14 弟子たちがパンを忘れた
- D 8:15 ファリサイ派の人々のパン種とヘロデのパン種によく気をつけなさい
- C' 8:16 弟子たちパンを忘れたことを論じる
- B' 8:17-18 「目があっても見えないのか。耳があっても聞かないのか。覚えていないのか。」
- A' 8:19-21 イエスによる奇跡のしるし

図 18
8:11-21 の構成

図一四 8:34-38 ヲ 9:1

この箇所は、新共同訳では一つのペリコピーとなっているが、元来は六つの独立した伝承であった可能性がある(注8)。前半の 8:34:38 が左図のような集中構造をとっているため、9:1は別のペリコピーとして編集された可能性が考えられる。Aはイエスを迫害し殺そうとするこの時代の人々についてであり、Bは自分の命を惜しむことでそれを失いそうになる者の記述が共通する。中心のCは、神のことを思わず人間のことを思っているというイエスの叱責であり、命を惜しみ、神の言葉を受け入れない言葉神の思いにかなわないことであることが全体として示されていると考えられる。

- A 8:31-32a イエスを排斥して殺す長老、祭司長、律法学者たち
- B 8:32b イエスの受難を止めようとするペトロ
- C 8:33 「あなたは神のことを思わず人間のことを思っている」
- B' 8:34:37 「自分の命を救いたいと思うものはそれを失う」
- A' 8:38 「神こそむいたこの罪深い時代」、「わたしとわたしの言葉を恥じるもの」

図 19
8:34-38 の構成

四一六 9:33-41

この個所も新共同訳では二つのペリコピーからなるが、結合することで左図のように一つの集中構造を見出すことができる。この個所もやはり、二つのペリコピーが編集段階で一つのペリコピーとされた個所ではないかと考えられる。Aにはイエスや弟子を支える存在についての記述が含まれており、Bには弟子たちへの勧告が記されている。またCにはイエスの名と、それによってイエスに従うかどうかの問題が記述されている。中心のDではイエスを受け入れることが神を受け入れることであることが語られ、全体として、イエスを受け入れ支えることを通して人が神を受け入れることが重要であつて、誰が偉いかということは問題ではないという趣旨となる。

A 9:33-34 イエスと弟子たちに場所を提供しているカファルナウムの家 (1:29, 2:1)

B 9:35 弟子たちへの勧告 (「すべての人の後になり…」)

C 9:36-37a イエスの名のために子供を受け入れる者は、イエスを受け入れる

D 9:37b 「わたしを受け入れる者は、わたしではなくて、わたしをお遣わしになった方を受け入れる」

E 9:38 イエスの名によって悪霊を追い出すが、イエスに従わない

F 9:39-40 弟子たちへの勧告 (「やめさせてはならない」)

G 9:41 「あなた方に一杯の水を飲ませてくれるものは必ずその報いを受ける」

図 20

9:33-41 の構成

四一七 13:1-13

この個所も新共同訳では二つのペリコピーからなるが、左図のように一つの集中構造を見出すことができる。Aでは、一つも残さずに崩れる石と、最後まで耐え忍べば救われるという言葉が対置されている。Bはイエスの名のために憎まれる者、すなわち弟子たちについての記述である。Cはどちらも騒乱に満ちた終末世界の描写であり、Dは弟子たちが明かしをしなければならぬ状況についての記述である。中心のEには、まず福音がすべての民に述べ伝えられなければならないという言葉が置かれる。全体では終末的状况における福音宣教の問題について語られているということがわかる。

A 13:1-2 石が一つも残らずに崩れる

B 13:3-5 ペトロ・ヤコブ・ヨハネ・アンデレ

C 13:6-8 終末の世界の描写

D 13:9 弟子の証しについて

E 13:10 「まず福音があらゆる民に伝えられなければならない」

F 13:11 弟子の証しについて

G 13:12 終末の世界の描写

H 13:13a 「私の名のためにあなたがたはすべての人に憎まれる」

I 13:13b 最後まで耐える者は救われる

図 21

13:1-13 の構成

四一八 14:12-26

この箇所は新共同訳では、過ぎ越しの食事をする(14:12-21)、主の晩餐(14:22-26)に分割するが、これは過ぎ越しの食事に関する一連の記事であり、また、翻訳や注解によって切り方の異なる箇所でもあって、必ずしも分割する必要はないとも言われている(注9)。さらに左図のようにこの箇所も集中構造をなしており、一つながりの記事としてみなすことは可能であると考えられる。

A 14:12-16 過ぎ越しの食事の準備

B 14:17-21 弟子の裏切りの予告

A' 14:22-26 新しい過ぎ越しの食事の制定

図22
14:12-26
の構成

四一九 15:16-32

この箇所は、新共同訳では、「兵士から侮辱される」と「十字架につけられる」の二つのペリコピーである。本論文でも二つに区切るが、左図のような集中構造と交差配列法の構造を考慮して、切断の位置を変更している。15:16-24における集中構造では、Aはイエスの衣を脱がせる行為が共通し、Bでは、つばを吐きかけることによる虐待を甘んじて受けるイエスと、苦痛緩和のための没薬入りのぶどう酒を拒否するイエスの姿が対比される。Cは、イエスを十字架につけるために連行する十字架の道行きの記述であり、中心のDは、心ならずもイエスの十字架を負うことになったキレネのシモンの記事が位置している。15:25-32の交差配列では、二人の強盗の記事と、イエスに十字架から降りるとののしる人々の記事が対応関係にある。

A 15:16-18 イエスの衣を脱がせる(紫の衣を着せる)

B 15:19 つばを吐きかける

C 15:20 十字架につけるために引き出す

D 15:21 シモンにイエスの十字架を担がせる

C' 15:22 十字架につける場所に連れて行く

B' 15:23 没薬を混ぜたぶどう酒を飲ませようとする

A' 15:24 イエスの衣を脱がせる(衣をくじで分ける)

図23
15:16-24
の構成

A 15:25-27 二人の強盗がともに十字架につけられる

B 15:29-30 十字架から降りるとののしる人々

B' 15:31 十字架から降りるとののしる大祭司と律法学者

A' 15:32 二人の強盗がイエスをののしる

図24
15:25-32
の構成

四一十 15:3-41

この箇所も新共同訳での分割位置を、左図に示すような集中構造(注10、一部省略して抜粋)に基づいて変更している。対応の意味

は注に記した本に詳述されているので本論文では割愛する。

- A 15:33 終末的出来事 (全地が暗くなる)
B 15:34 イエスの叫び
C 15:35 エリヤへの呼びかけ
D 15:36a-c 酸いぶどう酒による虐待
C' 15:36d エリヤへの呼びかけ
B' 15:37 イエスの叫び
A' 15:38 終末的出来事 (神殿の幕が避ける)

図 2 4
15:33-38 の構成

四十一 従来の区分との相違に関して

本論文におけるペリコピの区切りは、基本的に共時的解釈の視点に基づいて、最終編集段階で想定されたペリコピの区切りの復元を意図するものである。これに対して、通常の翻訳における区切りは、テキストの伝承過程における区切りは、元テキストの差異を問題にして、その違いから区切る場合も少なくない。このため、伝承過程としては異なる由来のテキストが、最終的な編集者によって合わされたことが明白な場合は、一般的な区分では別ペリコピとなるが、本論文では一つのペリコピとして扱う場合がありうる。このため、従来と異なるペリコピ区分となった箇所が十三箇所中七箇所である。

また、マルコ福音書中には受難の箇所 (15:1-41) のように、未だに広く支持される区分が存在せず、翻訳によっても切り方の異なる箇所も存在している。このため、このような箇所に関しては、共時的な修辭構造の視点から切り分けたため、従来の翻訳での区分と切断位置の異なる区分を適用することとなっている。

これらの理由により、本論文の区分においては、結果として八十五ペリコピ中の十三箇所が従来のペリコピ区分とは異なる区分となっている。しかしこの結果は、従来のテキスト伝承的視点からのテキスト区分と異なる視点から区分を試みた結果であって、これらの区分は必ずしも対立するものではないと思われる。

五 結語

修辭的構造の分析により、マルコ福音書全体の中心的な神学的関心は、イエスの死と復活の神秘にあることがわかった。また、五つに区分した場合の各々の中心には、群衆(1:36-37, 6:14-16)や弟子たち(9:32, 14:68-72)がイエスを理解しないという問題が色濃く反映されている。つまり、イエスの死と復活こそが重要であるが、これは人々に理解されないという神学的主題が修辭構造から示唆される。

マルコ福音書の著者が、なぜこのような複雑で巧妙な構造を福音書に導入したかについては、いくつかの原因が考えられる。一つは、すでに聖典となっていた律法の書に含まれたさまざまな修辭構造を模倣したという可能性である。近年の旧約聖書の研究成果によって、モーセ五書や他の旧約の書物に、非常に高度で複雑な修辭構造が多数含まれていることが明らかになりつつある。マルコ福音書の著者は、これらの旧約聖書における修辭的構造を熟知した上で、それらを新しい聖書である福音書に適用しようとしたのではないだろうか。このときに、モーセ五書の「五」という数字を用いて福音書の五部分構成を作ったとの推測も可能である。いわばマルコ福音記者にとっての

新しい律法の書であったと言える。

また、一般の修辭的構造と同様に、文章の切れ目、すなわちペリコピの区分を示す技法としての活用も理由として考えられる。全体を多層の集中構造にすることによって、どの位置がペリコピの切れ目であるかがより明示的になる。さらに、意味解釈の点から言えば、福音書全体の構造において、どの箇所とどの箇所が関連して神学を構成しているのか、ある箇所における神学的なテーマは何であるのかということもより明示的になり、誤解釈を防ぐ効果があるものと考えられる。このため、神学的理解のためにも修辭的構造の分析は重要な意味を持つと言える。

本論文で提唱した修辭構造では、マルコ福音書は多重の集中構造間に基づく複雑な対応関係によって構成されている。さらに、本論文で述べた構造に合わせて、全体の三分割、四分割、七分割による集中構造が存在する可能性があり、現在その詳細を分析中である。また、類似の多層集中構造は、マルコ福音書のみではなく、モーセ五書や他の福音書、使徒言行録にも存在する可能性があることは学術大会においてすでに指摘したが、今後はマルコ福音書の詳細な分析に合わせて、他の新旧約聖書における修辭構造の分析も行う予定である。

注

- (1) C. H. LOHR, "Oral Techniques in the Gospel of Matthew", CBQ, 21 (1961)403-435.
- (2) 森彬『ルカ福音書の集中構造』(キリスト新聞社、二〇〇七年)。
- (3) KYM SMITH, *The Amazing Structure of the Gospel of John*, South Australia 2005.
- (4) JEFFREY H. KRANTZ, "Crucified Son of Man or Mighty One? Mark's Chiasmic Gospel Structure and the question of Jesus' identity", http://www.preachingpeace.org/mark_chiasm.htm.
- (5) M. PHILIP SCOTT, "Chiasmic Structure: A Key to the Interpretation of Mark's Gospel", BibThBul, 15 (1985) 17-26.
- (6) 川島貞雄『マルコによる福音書・十字架への道イエス』(日本基督教団出版局、一九九六年) 九六〜九七頁。
- (7) 同書、一〇二〜一〇三頁。
- (8) 同書、一四四頁。
- (9) 田川健三『新約聖書訳と註 1 マルコ福音書／マタイ福音書』(作品社、二〇〇八年) 四二七頁。
- (10) 森彬『聖書の集中構造 下 新約篇』(ヨルダン社、一九九四年) 三五〜三八頁。